

# 雲井遺跡

第20次調査

発掘調査報告書

2006

神戸市教育委員会

# 雲 井 遺 跡

第 20 次 調 査

発掘調査報告書

2006

神戸市教育委員会

## 序

神戸市は、海上交通をはじめ、鉄道、高速道路などの陸上交通網により、物資や文化が往来し発展してきました。今年、神戸空港の開港によって、更なる発展を目指し、市制の運営を行っております。

今回発掘調査を実施した雲井遺跡は、陸上交通の主要ターミナルである三宮駅の東側に広がる遺跡です。周辺は、神戸港の開港以降、急速に市街化が進みました。そのため、埋蔵文化財の存在状況は長らく不明でしたが、昭和62年の第1次調査以降、20次に及ぶ調査によって、縄文時代から鎌倉時代の生活の痕跡が確認されています。

この報告書では、マンション建設に先立って実施した発掘調査の報告を行います。この地域に暮らしていた先人の足跡に触れ、地域の歴史研究や文化財の保護、普及啓発の資料として、市民の皆様に広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書の作成にご協力いただきました、事業主である株式会社日商エスティムをはじめ、関係諸機関に対し、厚く御礼申し上げます。

平成18年3月

神戸市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、神戸市中央区琴ノ緒町3丁目311番に所在する、雲井遺跡第20次発掘調査地点の調査報告書である。
2. 今回の調査は、マンション建設事業に伴うもので、神戸市教育委員会が、株式会社日商エヌシステムからの委託を受けて実施した。調査対象面積は、約880m<sup>2</sup>(約440m<sup>2</sup>×2面)である。現地調査は、平成17年3月25日から平成17年4月25日にかけて実施し、その後、神戸市埋蔵文化財センターにて、出土遺物の整理と報告書の作成を行なった。
3. 現地調査及び報告書の作成は、神戸市教育委員会学芸員 山口英正が担当した。
4. 現地での造構写真撮影は山口が行なった。遺物写真撮影は、独立行政法人奈良文化財研究所 牛島 茂氏の指導の下、杉本和樹氏(西大寺フォト)が行なった。
5. 本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「三宮」と神戸市発行の2千5百分の1地形図「三宮」を使用した。
6. 本書に使用した方位・座標は、平面直角座標系世界測地系で、標高は、東京湾平均海水面(T.P.)で示した。
7. 現地の発掘調査作業は、株式会社間地工業に委託して実施した。
8. 現地調査および遺物の整理、報告書の刊行にあたっては、株式会社日商エヌシステムの協力を得て実施しました。ここに記して感謝いたします。

# 目 次

序	
例 言	
目 次	
第1章 はじめに .....	1
第1節 雲井遺跡の立地と歴史的環境 .....	1
1) 遺跡の立地 .....	1
2) 歴史的環境 .....	3
第2節 雲井遺跡の概要 .....	3
第3節 調査に至る経緯と経過 .....	7
1) 調査に至る経緯 .....	7
2) 調査組織 .....	7
3) 調査の経過 .....	7
第2章 遺構と遺物 .....	9
第1節 調査の概要 .....	9
1) 調査の方法 .....	9
2) 基本層序 .....	9
第2節 第1遺構面(弥生時代~古墳時代後期) .....	10
1) 積穴住居 .....	11
2) 捩立柱建物 .....	11
3) 土坑 .....	12
4) 用途不明遺構 .....	12
5) 溝状遺構 .....	13
6) その他の遺構 .....	13
7) 遺構に伴わない遺物 .....	13
第3節 第2遺構面(绳文時代晩期~弥生時代中期) .....	14
1) 土坑 .....	15
2) 用途不明遺構 .....	16
3) その他の遺構 .....	16
第3章 まとめ .....	17

## 挿図目次

図1 雲井遺跡の位置 .....	1	図12 S K102・S X101平・断面図 .....	12
図2 雲井遺跡周辺の微地形 .....	2	図13 S D101平・断面図 .....	13
図3 宮井遺跡と周辺の遺跡 .....	4	図14 S X103平・断面図 .....	13
図4 雲井遺跡調査地点 .....	5	図15 遺構に伴わない遺物 .....	13
図5 調査区設定図 .....	9	図16 第2遺構面平面図 .....	14
図6 基本層序(1区北壁・2区東壁) .....	9	図17 S K205平・断面図 .....	15
図7 第1遺構面平面図 .....	10	図18 S K205出土遺物 .....	15
図8 S B101平・断面図 .....	11	図19 S X201平・断面図 .....	16
図9 S B102平・断面図 .....	12	図20 雲井遺跡の集落動向(1) .....	17
図10 S B103平・断面図 .....	12	図21 雲井遺跡の集落動向(2) .....	18
図11 S X101出土遺物 .....	12	図22 雲井遺跡の集落動向(3) .....	19

## 表目次

表1 雲井遺跡調査一覧 .....	6
-------------------	---

## 挿図写真目次

挿図写真1 作業風景 .....	16
------------------	----

## 写真図版目次

写真図版1	
1 区 第1遺構面(南東から)	
2 1区 第2遺構面(南東から)	
写真図版2	
2区 第1遺構面全景(北から)	
写真図版3	
1 2区 第1遺構面全景(南から)	
2 S B101(東から)	

## 写真図版4

1 S B102(南から)	
2 S B103(北から)	

## 写真図版5

1 2区 第2遺構面全景(北から)	
2 S K201上層遺物出土状況(東から)	

## 写真図版6

1 遺構に伴わない遺物	
2 S K201上層出土遺物	

# 第1章 はじめに

## 第1節 雲井遺跡の立地と歴史的環境

### 1) 遺跡の立地

雲井遺跡は、主要ターミナルとして交通機関が集中する三宮駅の東側に隣接して広がり、中央区雲井通、旭通、琴ノ緒町を中心に展開している。現在は、JR・阪神・阪急の各社の路線が当遺跡の中央部を横断し、古くは西国街道が通り、古来から物資や文化の往来に触れた場所にあたる。

当地は、六甲山南麓の典型的な立地条件にある。山麓部と海岸部の幅が約2kmと狭く、六甲山系に源を発する河川は、花崗岩を主体とする山肌を侵食して南下し、平野部の大半は、土砂を堆積させた扇状地を形成している。遺跡は平野部の河川に近接する微高地を中心に展開している。この立地条件は、水利上は有利である反面、保水力に乏しい土壤と斜度のある短い河川は、水害の影響を受けやすく、各遺跡で洪水の痕跡が確認できる。雲井遺跡周辺では、西側に隣接する「暴れ川」と称された旧生田川が、明治4年に嘉納宗七らによって現在の場所に付け替えられた後も、昭和13年や昭和42年に大水害をもたらしている。

昭和48年国土地理院発行の1:2500地形図に記された標高より、等高線を復元した地形図を概観すると、雲井遺跡は、扇状地上の緩斜面に位置している。現在の市道税関線が旧生田川の流路に相当し、加納町3丁目交差点付近より以北は侵食作用が強く、雲井遺跡付近では堆積作用により自然堤防が形成されている。旧生田川の流路付近は、花崗岩の風化土壤の堆積により地耐力が弱く、阪神大震災で建物の倒壊等大きな被害を受けた場所に当たり、埋蔵文化財の分布が見られない。自然堤防の形成は、右岸に比べ左岸の発達が弱く、雲井遺跡の西南部は、氾濫時の影響を受けやすい地形が読み取れる。



図1 雲井遺跡の位置

雲井遺跡内の微地形をみると、北西部は自然堤防上に位置するが、南西部は自然堤防の形成が弱まっている。東半部は、現在の生田川の堤防整備による影響を除くと、顕著な等高線の乱れが無く、西半分に比べて安定した立地条件であると言える。谷状の地形は、当遺跡の中央部やや東側で認められる。この谷状地形の両側に、わずかな高まりを示す等高線の張り出しが見られる。



図2 雲井遺跡周辺の微地形

## 2) 歴史的環境

### 縄文時代

熊内遺跡<sup>(1)</sup>では、縄文時代早期前半の竪穴住居や、中期末から後期初頭にかけての土坑が検出されている。縄文時代晚期の遺物も検出されており、遺構の存在が推定されている。宇治川南遺跡<sup>(2)</sup>では、旧河道から早期～晚期の遺物が確認されたに留まっている。

### 弥生時代

丘陵上には、弥生時代中期後半の布引丸山遺跡<sup>(3)</sup>が存在する。市内では後期以降に遺跡数が増え、熊内遺跡では、大規模な二重環濠を巡らす集落が検出されている。日暮遺跡<sup>(4)</sup>では、後期末頃の竪穴住居が確認されている。中山手遺跡<sup>(5)</sup>では後期末の溝や土坑などが検出されている。

### 古墳時代

熊内遺跡では、前期の竪穴住居が検出されている。日暮遺跡では、中期の竪穴住居が検出されている。生田遺跡<sup>(6)</sup>では、中期末から後期の竪穴住居や掘立柱建物が多数検出されている。二宮遺跡、二宮東遺跡<sup>(7)</sup>で中期から後期の集落が確認されている。熊内遺跡では後期の土坑墓や木棺墓が検出されている。下山手遺跡<sup>(8)</sup>では、古墳時代後期の掘立柱建物群が検出されている。

古墳は、大正年間に発掘され、墳丘と石室が遺存している中宮古墳<sup>(9)</sup>や中宮黄金塚古墳<sup>(10)</sup>を除き現存しない。当遺跡の北側には、生田古墳<sup>(11)</sup>等の後期古墳が点在したといわれるが、詳細は不明である。

### 奈良時代

二宮遺跡では、飛鳥時代の鋳造遺構が確認されている。同時期の集落は、下山手北遺跡<sup>(12)</sup>でも確認されている。奈良時代の掘立柱建物が検出された日暮遺跡は、古代山陽道との関連が考えられる遺跡である。二宮遺跡では、流路状の遺構から奈良時代前半の土器や土馬が出土した。旧三宮駅構内遺跡<sup>(13)</sup>では、奈良時代後半の土器が大量に出土している。

### 平安時代以降

平安時代以降の遺跡は少ない。下山手北遺跡<sup>(14)</sup>では、平安時代前期の園地と掘立柱建物が検出されている。日暮遺跡では、平安時代末から鎌倉時代の掘立柱建物群が検出された。宇治川南遺跡、吾妻遺跡、中山手遺跡、元町遺跡<sup>(15)</sup>等で鎌倉時代の掘立柱建物等の遺構が検出されている。南北朝期から室町時代にかけて、現在、城山と呼ばれる山上に滝山城<sup>(16)</sup>が築城される。戦国時代末期には、兵庫県庁付近に花隈城<sup>(17)</sup>が築城されるが、城下の詳細は不明である。

## 第2節 雲井遺跡の概要

雲井遺跡では、これまでに19次に及ぶ調査が行なわれており、縄文時代早期から中世に至る遺構や遺物が検出されている。特に、縄文時代晚期、弥生時代中期、古墳時代後期に集落が盛んに行なうことが確認されており、生田川流域ではもっとも遺構密度の高い遺跡である。

### 縄文時代

第4次調査地点で、早期前半の集石遺構や土坑が検出されている。大川式・神宮寺式と呼ばれる阪神間最古の押型紋上器を伴っている。

第1次・第7次・第9次・第19次調査地点で、晩期～弥生時代前期の土坑、柱穴、土坑墓などが検出されており、広範囲に集落が存在することは明らかである。特に、晩期の上器棺（第1次・第7次調査）は、市内では東灘区鎌原遺跡で類例が知られているに過ぎず、当時の墓制を知る上で貴重な資料である。

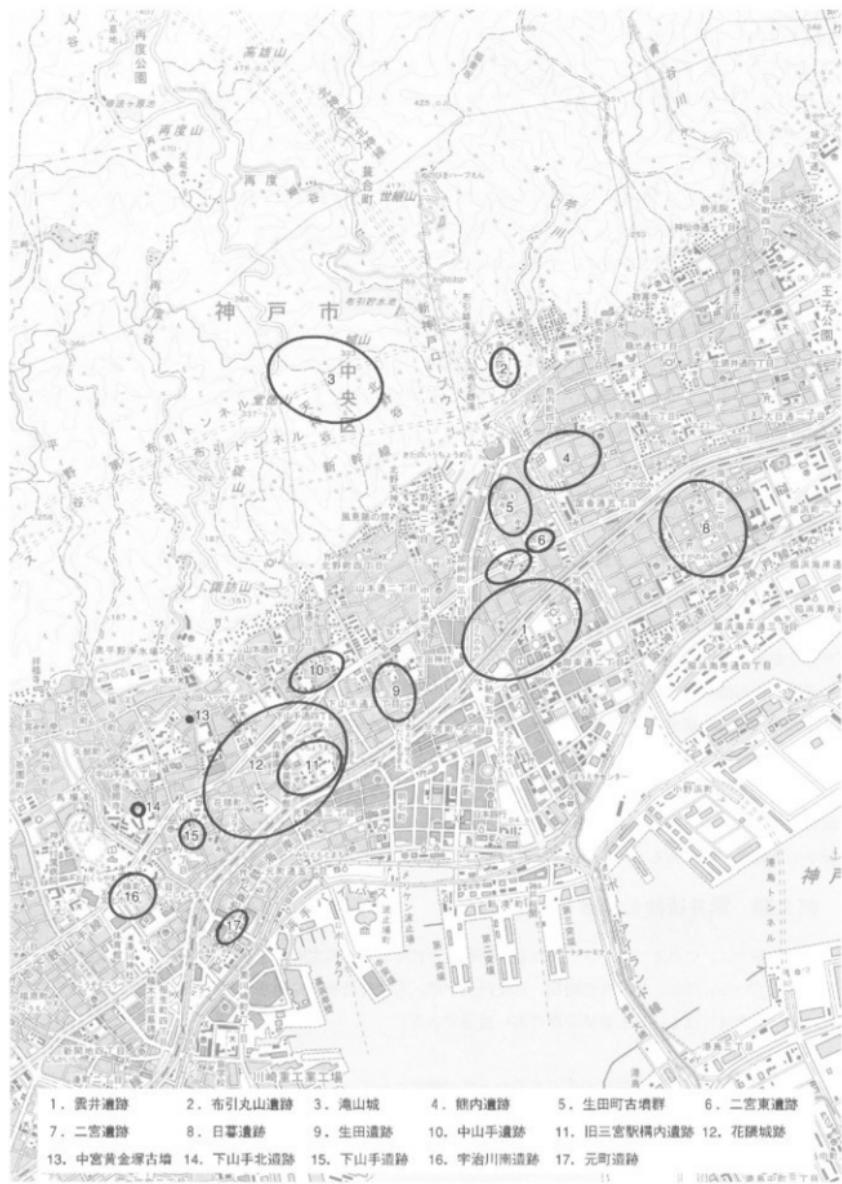


図3 霧井遺跡と周辺の遺跡

### 弥生時代

弥生時代前期の遺構は、第1次・第2次・第3次・第4次・第8次・第9次・第14次・第16次・第17次の調査地点で検出されており、集落が広範囲に広がっていたことが確認されている。第8次調査では前期後半の周溝墓が検出されている。また、中期の方形周溝墓が、第1次・第8次・第16次・第19次調査地点で検出されており、遺跡の広範囲が墓域として利用されていたことが判明している。第1次調査では、10数基の存在が想定されており、六甲山南麓で周溝墓群の広がりを確認できた調査例として重要である。

### 古墳時代以降

第8次・第10次・第13次・第19次調査で、古墳時代後期の遺構や遺物を検出している。第10次調査地点では、竪穴住居や掘立柱建物を検出しているが、他の地点では、溝や流路を除くと柱穴や土坑が散見されるに過ぎない。居住域は、当遺跡の北東部付近を中心に展開すると考えられ、当遺跡に北接する二宮遺跡と二宮東遺跡でも古墳時代後期の遺構が確認されており、当時期の集落が広範囲に展開していたことが確認されている。第8次調査では、古墳時代後期から奈良時代の柱穴を多数検出しており、二宮遺跡と同様の様相を示している。以上のことから、古墳時代後期から奈良時代にかけては、両遺跡にまたがる大きな集落を形成していたと想定される。



次 数	年 度	調 査 主 体	開始日	終了日	面 積	主 な 内 容
1	S62	神 戸 市 教 育 委 員 会	870602	880209	4,200m <sup>2</sup>	縄文時代前期の炉跡 石組遺構 弥生時代中期末の周溝墓
2	H1	震 井 遺 跡 調 査 団	890808	891014	947m <sup>2</sup>	縄文後期～弥生時代前期土坑・ピット 古墳時代流路
3	H3	神 戸 市 教 育 委 員 会	910401	910419	80m <sup>2</sup>	縄文時代早期の土器、石錐 弥生時代前期の土器
4	H3	神 戸 市 教 育 委 員 会	910722	911127	960m <sup>2</sup>	縄文時代早期の土坑、集石土坑 弥生時代前期の土坑、溝
5	H4	神 戸 市 教 育 委 員 会	920415	920427	83m <sup>2</sup>	弥生時代の溝、土坑
6	H6	神 戸 市 ス ポ ー ツ 教 育 公 社	940423	940604	268m <sup>2</sup>	弥生時代中期の溝、流路 古墳時代後期の溝、ピット
7	H7・8	神 戸 市 教 育 委 員 会	960308	960408	288m <sup>2</sup>	弥生時代中期～後期の掘立柱建物、土坑 縄文時代中期～後期の土坑 古墳時代前期の溝
8	H8	神 戸 市 教 育 委 員 会	961210	970120	170m <sup>2</sup>	弥生時代前期後半の周溝墓 古墳時代、奈良時代の柱穴
9	H8	神 戸 市 教 育 委 員 会	970227	970404	150m <sup>2</sup>	縄文時代中期から弥生時代の溝 弥生時代前期の溝 弥生時代中期の土坑 錫倉時代の溝
10	H8	神 戸 市 教 育 委 員 会	970317	970526	800m <sup>2</sup>	古墳時代～古代の溝 住居 掘立柱建物
11	H12	神 戸 市 教 育 委 員 会	001011	001024	60m <sup>2</sup>	弥生時代中期のピット、溝
12	H12・13	神 戸 市 教 育 委 員 会	010326	010410	172m <sup>2</sup>	弥生時代中期の竪穴住居 古墳時代後期の竪穴住居
13	H14	神 戸 市 教 育 委 員 会	020226	020318	145m <sup>2</sup>	古墳時代後期の溝
14-1	H14	神 戸 市 体 育 協 会	020722	020917	320m <sup>2</sup>	平安時代後期の集石遺構、弥生時代中期の大規模竪穴住居
14-2	H14	神 戸 市 体 育 协 会	020722	020917	130m <sup>2</sup>	弥生時代前期の溝、中世の土坑
15	H14	神 戸 市 教 育 委 員 会	020725	020802	15m <sup>2</sup>	土器小片 遺跡の東端部か？
16-1	H14	神 戸 市 教 育 委 員 会	020828	020909	55m <sup>2</sup>	縄文時代の包含層 弥生時代前期のピット、土坑
16-2	H14	神 戸 市 教 育 委 員 会	021118	021205	400m <sup>2</sup>	弥生時代前期のピット、土坑 中期の方形周溝墓 中世の掘立柱建物
17	H14・15	神 戸 市 教 育 委 員 会	030303	030414	212m <sup>2</sup>	古墳時代後期のピット 弥生時代前期の土坑、ピット
18	H15	神 戸 市 教 育 委 員 会	040614	040618	100m <sup>2</sup>	弥生土器
19	H15	神 戸 市 教 育 委 員 会	040624	040702	60m <sup>2</sup>	弥生土器（供獻土器）
20	H15・16	神 戸 市 教 育 委 員 会	050325	050425	440m <sup>2</sup>	縄文時代晚期の土坑 古墳時代後期の掘立柱建物

表1 震井遺跡調査一覧

### 第3節 調査に至る経緯と経過

#### 1) 調査に至る経緯

今回の調査対象地は、神戸市埋蔵文化財包蔵地図に記載されている雲井遺跡の範囲内であり、試掘調査の結果、埋蔵文化財の存在が確認された。試掘調査の結果を受けて、事業主である株式会社日商エステムと協議を行い、マンション建設によって文化財が影響を受ける範囲（約440m<sup>2</sup>）について発掘調査を実施した。

#### 2) 調査組織（平成16・17年度）

神戸市文化財保護審議会 史跡考古担当委員

檀上 重光 前神戸女子短期大学教授

工楽 善通 大阪府立狭山池博物館館長

和田 晴吾 立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会事務局

教育長 小川 雄二

社会教育部長 高橋 英比古

教育委員会参事

（文化財課長事務取扱） 桑原 泰豊

社会教育部主幹 渡辺 伸行（埋蔵文化財指導係長事務取扱）

宮本 郁雄（埋蔵文化財センター所長 平成16年度）

丸山 肇（埋蔵文化財センター所長 平成17年度）

埋蔵文化財調査係長 丹治 康明

文化財課主査 丸山 肇（平成16年度） 香木 宏明 安田 滋（平成17年度）

事務担当学芸員 東 喜代秀

調査担当学芸員 山口 英正

保存科学担当学芸員 中村 大介

遺物整理担当学芸員 谷 正俊（平成16年度） 内藤 俊哉（平成17年度）

#### 3) 調査の経過

調査区を2つの区に設定し、平成17年3月26日から、文化財に影響のない残土について重機掘削を行い、残土を搬出した（～4月4日）。残土搬出と併行して人力による調査を開始した。1区（20m<sup>2</sup>）では遺構面を2面検出した。第1遺構面は4月8日に調査を完了し、統いて第2遺構面は4月15日に調査を完了した。2区（420m<sup>2</sup>）は後世の削平の影響を強く受けしており、一部で遺構面を2面検出したが、大半の調査区では遺構面の残存状況は悪く、縄文時代晚期から古墳時代の遺構を同一面で検出した。第1遺構面は4月8日に全景撮影を行い、4月11日に図化を完了した。第2遺構面は4月18日に全景撮影を行い、4月21日に図化を完了し、現地調査はすべて終了した。4月25日に遺構の埋め戻しと、工事車両進入用スロープを造成し現地での作業は完了した。同日、株式会社日商エステムに現地の引渡しを行い、出土遺物と資材を神戸市埋蔵文化財センターに搬出し、報告書の作成に向けて、出土遺物及び写真、図面等の整理作業を行った。

## 1. 註

- (1) 丸山 漢他「熊内遺跡」『平成元年度神戸市埋蔵文化財年報』1992 神戸市教育委員会  
浅間俊大編『神戸市東灘区熊内遺跡 - 第2次調査 -』1996 六甲山麓遺跡調査会  
安田 漢他「熊内遺跡第3次調査発掘調査報告書」2003 神戸市教育委員会
- (2) 丹治康明他「宇治川南遺跡」『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』1986 神戸市教育委員会
- (3) 小林行雄「市布引丸山の弥生式土器」『考古学』6卷3号 1935 東京考古学会
- (4) 山本雅和他「日暮遺跡 第4次調査」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』1994 神戸市教育委員会  
井尻 格「日暮遺跡 第7次調査」『平成5年度神戸市埋蔵文化財年報』1996 神戸市教育委員会  
谷 正俊「日暮遺跡発掘調査報告書」1989 神戸市教育委員会
- (5) 木戸雅寿「中山手遺跡 第2次調査」『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』2000 神戸市教育委員会  
平田博幸他「中山手遺跡」『平成10年度年報』1999 兵庫県教育委員会埋蔵文化財事務所
- (6) 丸山 漢「生田遺跡」『昭和62年度神戸市埋蔵文化財年報』1990 神戸市教育委員会
- (7) 谷 正俊「二宮遺跡 第1次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』2001 神戸市教育委員会  
石島三和「二宮遺跡発掘調査報告書 - 第2次調査 -」2003 神戸市教育委員会
- (8) 「二宮東遺跡 発掘調査報告書」 調査団
- (9) 藤井直正・藤本史子他「神戸市・下山手遺跡」2004 大手前大学史学研究所
- (10) 新修神戸市史編集委員会編「新修神戸市史 歴史編」自然・考古 1989 神戸市役所
- (11) 菅本宏明「中宮黄金塚古墳」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』1994 神戸市教育委員会
- (12) 木村次雄・小林行雄「駿足発見の神」『市生田町古墳』『考古学雑誌第20巻第6号』1930 考古学会
- (13) 平成6・7年度 淡神文化財協会調査  
平成17年度 神戸市教育委員会調査
- (14) 菅本宏明他「旧三官駅構内遺跡」『平成2年度神戸市埋蔵文化財年報』1993 神戸市教育委員会
- (15) 13と同じ
- (16) 古川久雄他「神戸市中央区吾妻遺跡 第2次調査」1994 六甲山麓遺跡調査会
- (17) 村尾政人他「元町遺跡発掘調査概要」1991 淡神文化財協会
- (18) 田部美智雄「淡山城」『日本城郭体系 第12巻 大阪・兵庫』1981 新人物往来社
- (19) 田部美智雄「花隈城」『日本城郭体系 第12巻 大阪・兵庫』1981 新人物往来社

## 雲井遺跡関係

- 丹治 康明 「雲井遺跡第1次発掘調査報告書」1986 神戸市教育委員会  
阿部 副 「雲井遺跡発掘調査実績報告書」1992 雲井遺跡調査団
- 月治 康明 「雲井遺跡第3次調査」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』1994 神戸市教育委員会
- 安田 漢 「雲井遺跡第4次調査」『平成3年度神戸市埋蔵文化財年報』1994 神戸市教育委員会
- 富山 直人 「雲井遺跡第5次調査」『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』1995 神戸市教育委員会
- 松林 宏 「雲井遺跡第6次調査」『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』1997 (財)兵庫市スポーツ教育公社
- 山本 雅和 「雲井遺跡第7次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』1998 神戸市教育委員会
- 西岡 力次・福島 孝行 「雲井遺跡(第8次調査) - 震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査概要 -」1998 神戸市教育委員会
- 前川 佳久 「雲井遺跡第9次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』1999 神戸市教育委員会
- 富山 直人 「雲井遺跡第10次調査」『平成8年度神戸市埋蔵文化財年報』1999 神戸市教育委員会
- 池田 敏 「雲井遺跡第11次調査」『平成12年度神戸市埋蔵文化財年報』2003 神戸市教育委員会
- 窓山 直人 「雲井遺跡第12次調査」『平成13年度神戸市埋蔵文化財年報』2004 神戸市教育委員会
- 阿部 功 「雲井遺跡第13次調査」『平成14年度神戸市埋蔵文化財年報』2005 神戸市教育委員会
- 石島 三和 「雲井遺跡第14・1・2次調査」『平成14年度神戸市埋蔵文化財年報』1994 神戸市教育委員会
- 富山 直人 「雲井遺跡第15次調査」『平成4年度神戸市埋蔵文化財年報』1995 神戸市教育委員会
- 阿部 敏生 「雲井遺跡第16次調査」『平成14年度神戸市埋蔵文化財年報』2005 神戸市教育委員会
- 中居さやか 「雲井遺跡第17次調査」『平成15年度神戸市埋蔵文化財年報』2006刊行予定 神戸市教育委員会
- 浅谷 誠吾 「雲井遺跡第18次調査」『平成15年度神戸市埋蔵文化財年報』2006刊行予定 神戸市教育委員会
- 浅谷 誠吾 「雲井遺跡第19次調査」『平成15年度神戸市埋蔵文化財年報』2006刊行予定 神戸市教育委員会

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 調査の概要

#### 1) 調査の方法

今回の調査は、マンション建設に伴い文化財が影響を受ける部分について実施したもので、遺物包含層直上までバックホーにて掘削を行った後、人力による調査を実施した。北側の調査区を1区、南側の調査区を2区と設定した。遺構面は2面確認できたが、2区の大半は後世の耕作により大きく削平されており、同一調査面で縄文時代晚期から古墳時代後期の遺構が検出された。

#### 2) 基本層序

現標高は15.3mから16.0mを測る。基本層序は、現代の盛土・表土層下、古墳時代以降の耕作土が数層存在し、継続した生産活動が行われていた状況が窺える。洪水等の多量の土砂の堆積は無く、安定した立地条件であるといえる。標高14.4~14.5mが古墳時代の遺構面で、標高14.0~14.1mが縄文時代晚期の遺構面である。

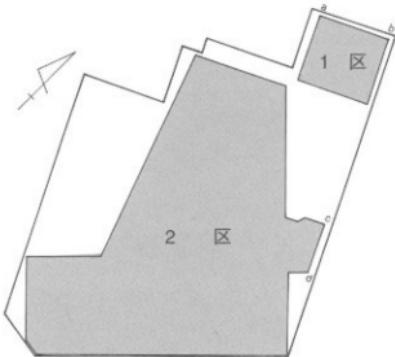


図5 調査区設定図

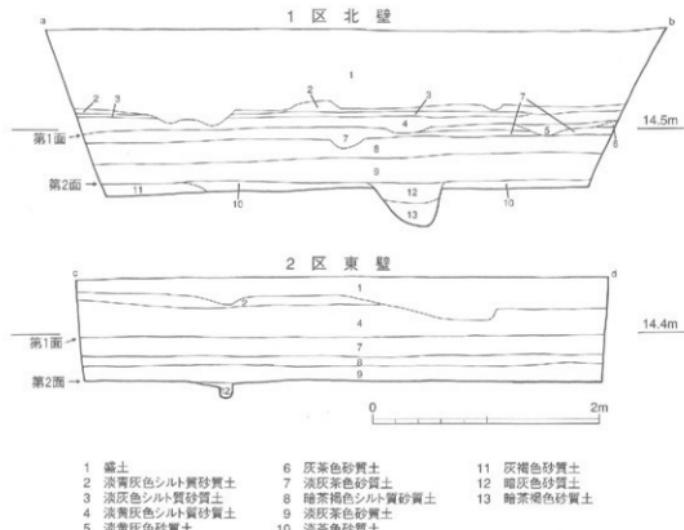


図6 基本層序（1区北壁・2区東壁）

## 第2節 第1遺構面(弥生時代～古墳時代後期)

1区では土坑を4基検出した。いずれも搅乱により一部が失われており、詳細は不明である。遺物は出土しなかった。

2区では竪穴住居1棟・掘立柱建物2棟・土坑・柱穴等を検出した。遺構検出面の直上層は耕土層で、耕作の影響を強く受けている。遺物包含層は残存せず、遺構の遺存状況も悪い。

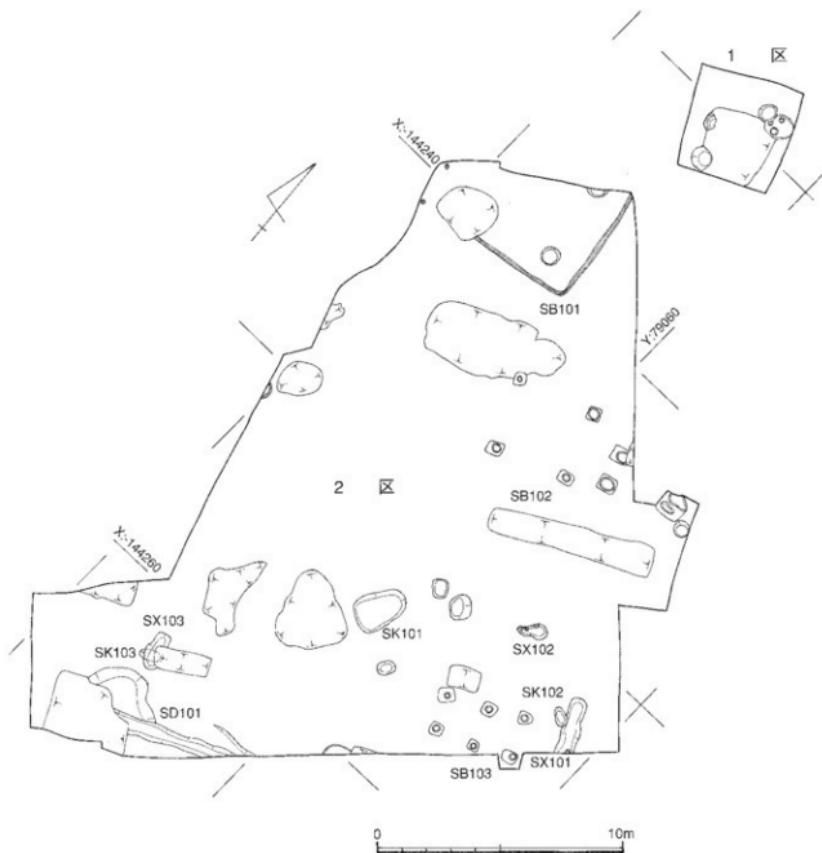


図7 第1遺構面平面図

## 1) 積穴住居

### S B101

方形の積穴住居である。全体が耕作による強い削平を受けている。西辺部は削平により失われているため全容は不明であるが、東側と南側の周壁溝と柱穴2基を検出した。残存長は、南北5.1m以上、東西4.3m以上である。柱穴と周壁溝の配置から1辺約5.8mの規模が復元できる。ベッド状遺構、中央土坑は確認できなかった。

柱穴は、直径約75~90cm、深さ50cmを測る。柱痕の直径は、約20cmである。周壁溝は、東辺と南辺で検出した。周壁溝の規模は、幅約20~25cm、深さ約5~10cmである。柱穴及び床面直上から、土師器の細片が出土したが、詳細な時期は不明である。

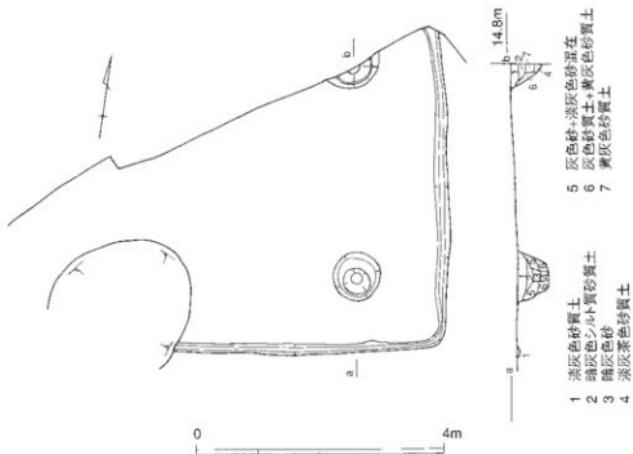


図8 SB101平・断面図

## 2) 掘立柱建物

### S B102

1間×1間の掘立柱建物である。建物の規模は、南北3.30m、東西3.45mを測る。柱穴は、一辺約50~80cmの方形の掘形を持つ。南北の柱列方向は、N25°Wである。S P10の埋土より土師器の細片が出土したが、時期を特定できない。

### S B103

1間×2間の掘立柱建物である。建物の規模は、梁行3.55m、桁行1.95mを測る。柱穴は、一辺約45~70cmの方形の掘形を持つ。桁行方向は、S B102と同様、N25°Wである。柱穴から須恵器、土師器の細片が出土しており、所属時期は6世紀後半と考えられる。

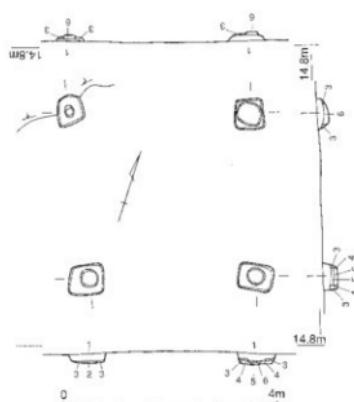


図9 SB102平・断面図

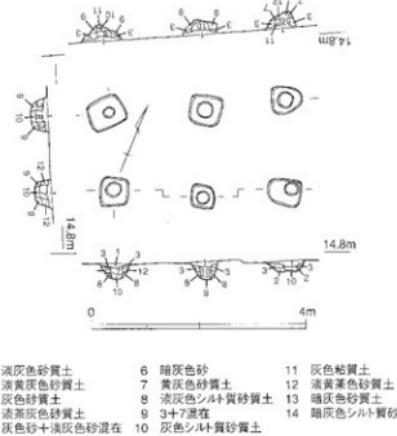


図10 SB103平・断面図

### 3) 土坑

S K101

長辺2.2m、短辺1.5m、深さ5cmの土坑である。遺物は出土しなかった。

S K102

長辺80cm、短辺45cm、深さ5cmの土坑である。遺物は出土しなかった。遺構の切り合い関係より、SX101に後出する遺構である。

S K103

長辺85cm、短辺45cm、深さ45cmの土坑である。遺構の切り合い関係より S X103に先行する遺構である。埋土より、弥生土器とサスカイトの小片が出土したが、詳細な時期は不明である。

### 4) 用途不明遺構

S X101

長辺2.5m以上、幅70~80cm、深さ25cmの用途不明遺構である。切り合い関係から、S K102に先行する。埋土上層より、古墳時代後期から平安時代の須恵器と土師器の破片が出土した。1は壺の口頭部である。口径11.2cmを測る。

口縁部は内傾して立ち上がった後、強く外反する。口縁端部は丸く、垂下する部分も丸く收めている。口縁部は内外面共にナデ、胴部内面は同心円状のタタキで形成している。

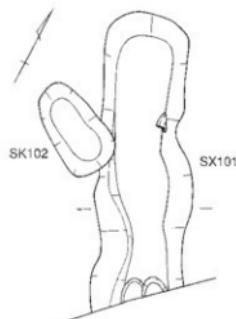
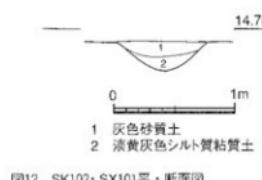
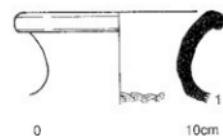


図11 SX101出土遺物



## S X102

最大長120cm、最大幅60cm、深さ20cmの不定形の遺構である。北側の肩部に直径10cm程度の小穴が3ヶ所存在するが、遺構の新旧は不明である。遺物は出土しなかった。

## S X103

長径165cm、短径75cm、深さ20cmの用途不明遺構である。切り合ひ関係から、S K103より後出する遺構である。埋土上層より6世紀後半と考えられる須恵器片が出土した。

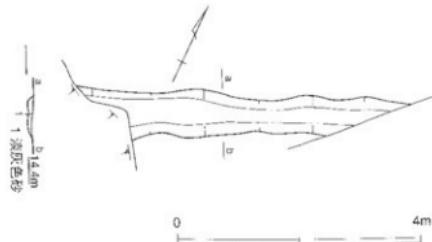


図13 SD101平・断面図

## 5) 溝状遺構

## S D101

長さ5.5m以上、幅55cm、深さ約10cmの溝状遺構である。等高線に平行する溝で、溝底レベルは東側がわずかに低い。埋土から中世以降の須恵器と土師器の小片が少量出土した。

## 6) その他の遺構

S B102の東側で、方形の掘形を持つ柱穴を2基検出した。調査区の制約により詳細は不明であるが、掘立柱建物を構成する遺構である可能性が高い。遺物は出土しなかった。

## 7) 遺構に伴わない遺物

第1遺構面検出中に、弥生時代前期後半から近世に至る遺物が数点出土した。図化できたのは3点である。2は須恵器坏蓋である。口径13.5cmを測る。口縁部内面に浅い段を持つ。3は坏身である。口径12.7cmを測る。4は土師器の壺である。口径12.8cmを測る。口縁部は上方に立ち上がり、端部は丸く収める。外面はタテ方向のハケを施した後、口縁部はヨコ方向のナデを施す。内面の調整は不明である。

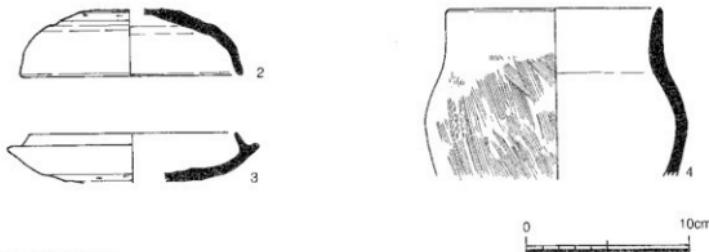


図15 遺構に伴わない遺物

### 第3節 第2遺構面（縄文時代晩期～弥生時代中期）

土坑、不定形の落ち込み、柱穴等を検出した。

1区では土坑を1基検出した。長辺115cm以上、短辺110cm、深さ約40cmの土坑である。埋土より弥生土器の小片が出土したが、詳細な時期は不明である。

2区では土坑4基、用途不明遺構1基、柱穴等を検出した。

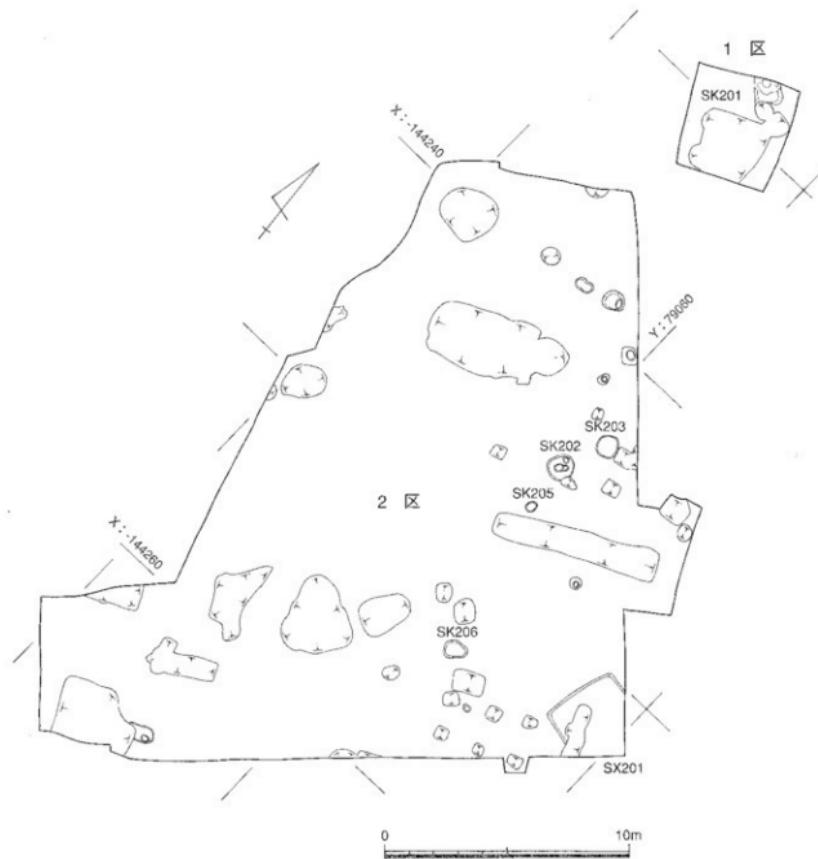


図16 第2遺構面平面図

## 1) 土坑

SK 202

直径約115cm、深さ25cmの不整円形の土坑である。直徑20~40cmの柱状の落ち込みを検出したが、遺存状況が悪く、柱穴とは確定できない。埋土からサスカイトの小片が出土した。

SK 203

直径約80cm、深さ10cmの円形の土坑である。遺物は出土しなかった。

SK 205

長径50cm、短径40cm、深さ10cmの梢円形の土坑である。埋土上層より、縄文時代晚期の深鉢の破片とサヌカイト片が出土した。

5は猿原式の深鉢である。復元口径31.3cmを測る。胴部と口縁部の屈曲は明瞭で、口縁部は内傾した後外反し、口縁端部上端にV字形のキザミを施す。内面と口縁部外面はナデを施す。胴部外面は横方向のケズリを施す。胴部と口縁部の屈曲部直上に逆D字状の刺突文を巡らす。また、同工具により、口縁部外面に3列の刺突文を施す。接合しない口縁部の破片では刺突文が端部近くまで施されている。胴部はハラケズリを施す。

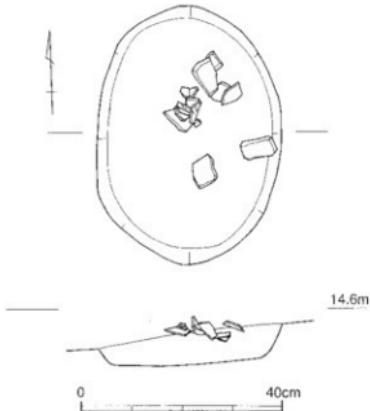


図17 SK205 平・断面図

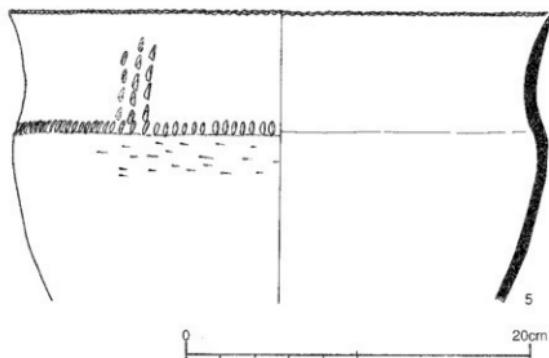


図18 SK205出土遺物

### S K 206

長径約95cm、短径約70cm、深さ30cmの不整形の土坑である。西側は袋状にオーバーハンプしている。埋土からは炭の小片が多く出土したが、遺物は出土しなかった。

### 2) 用途不明遺構

#### S X 201

南北3.2m、東西1.5m以上、深さ約5cmの方形の遺構である。柱穴が1基検出されており、竪穴住居である可能性があるが、中央土坑や周壁溝等の施設が検出されず、確定できない。埋土から遺物は出土しなかった。

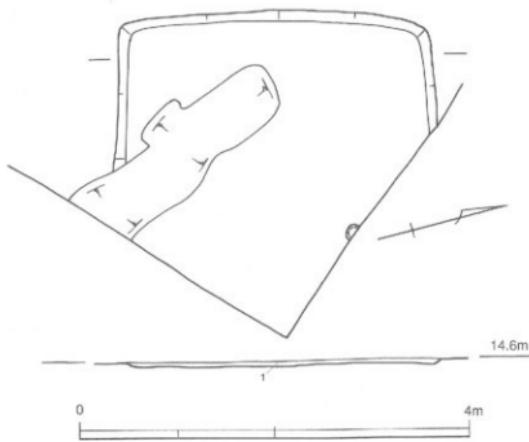


図19 SX201平・断面図

### 3) その他の遺構

柱穴、土坑等を数基検出したが、いずれも遺物は出土しなかった。



写真写真1 作業風景

## 第3章　まとめ

今回の調査地は、後世の耕作による削平の影響が大きく、検出された遺構は少ない。しかし、これまで不明であった遺跡の北西部の様相を示す資料として重要である。今回の成果により、縄文時代晚期の土坑と古墳時代後期の掘立柱建物が検出され、両時期に集落が北西部に拡大することが確認でき、当遺跡の集落動向を考える上で重要である。当章では、今回の調査成果を踏まえ、これまでの雲井遺跡の調査成果を整理し、集落動向について検討したい。

**検討方法** それぞれの調査成果については、十分な整理作業がなされていないものが多いことと、遺跡の全容を把握するためには、圧倒的に調査面積が少ないため、詳細な集落動向を明らかにすることはできない。ここでは、既報告資料から、一次資料（直接的に生活の痕跡を示す資料。住居、土坑、柱穴等の遺構）と二次資料（間接的に生活の痕跡を示す資料。溝、自然流路、遺構に伴わない遺物等）を抽出し、調査区を単位として時代毎の分布図を作成し、集落動向について検討した。さらに、弥生時代に関しては、方形周溝墓を主体とする墓域と、居住域の動向を伺う資料に恵まれているため、一次資料から居住域と墓域を抽出して検討した。

**縄文時代** 後期に至るまでは、一次資料の分布範囲が狭く、小規模な集落が場所を変えて存在したようである。早期前半の一次資料は、中央部の微高地で確認されている。前期は南側の低位で、中期から後期には、やや高位で少數確認されているが、資料が少なく不明である。晚期は前時代までの集落立地とは異なり、一次資料の分布範囲が広がる。これまで開発されていなかった北西側にも居住域が広がり、当遺跡における最初の集落拡大期といえる。

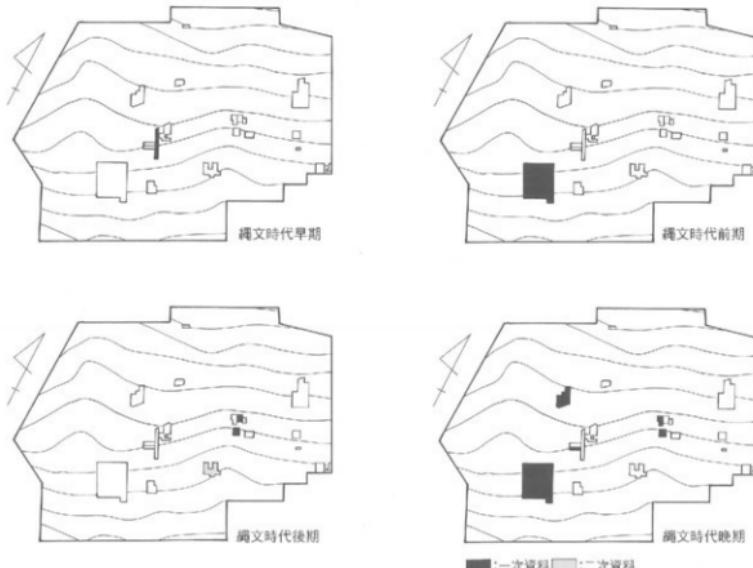


図20 雲井遺跡の集落動向(1)

弥生時代 前期前半は、縄文時代晩期から継続する居住域が存在するが、前期後半まで継続しない。前期後半になると、一次資料が広い範囲で確認され、生活域の拡大が伺える。一次資料のうち、第8次調査で検出された前期後半の周溝墓は、当遺跡における最古の周溝墓であり、また、第16次調査で検出された中期前半の周溝墓の存在は、周溝墓を採用する埋葬行為が、低位に移動しながら、弥生時代中期後半に至るまで継続して行われていた可能性を示唆している点で重要である。

中期後半になると、これまで居住域であった南半部に方形周溝墓群が形成される。居住域は南半部にも継続して存在するが、北半部のやや高位にも広がり、土地利用に大きな変化が認められる。中期前半の資料が少なく、中期中葉の資料が全く確認されていないため、この変化の契機については不明である。しかし、中期後半の生活域と墓域が近接して存在することは、同時期の市内の遺跡では、数少ない集落構成を示している点で重要である。

弥生時代後期から古墳時代前期の資料は極めて少なく、様相は不明である。

古墳時代 後期に至るまで、一次資料、二次資料共に少なく、集落の様相は不明である。後期には、高位である北半部に居住域が広がり、集落は最大規模に広がる。竪穴住居をはじめ、方形の掘形を持つ掘立柱建物が検出されている。

飛鳥・奈良時代 古墳時代後期に拡大した集落は、飛鳥時代以降、規模を縮小する。北側に隣接する二宮遺跡で飛鳥時代の鍛冶遺構が検出されており、集落の中心が北側に移動している可能性がある。

平安時代 一次資料の検出範囲が広がるが、資料数が少なく居住域の動向は不明である。この時期以降、耕作層が調査区全域で検出されることから、生産域としての利用が本格的に始まったと考えられる。

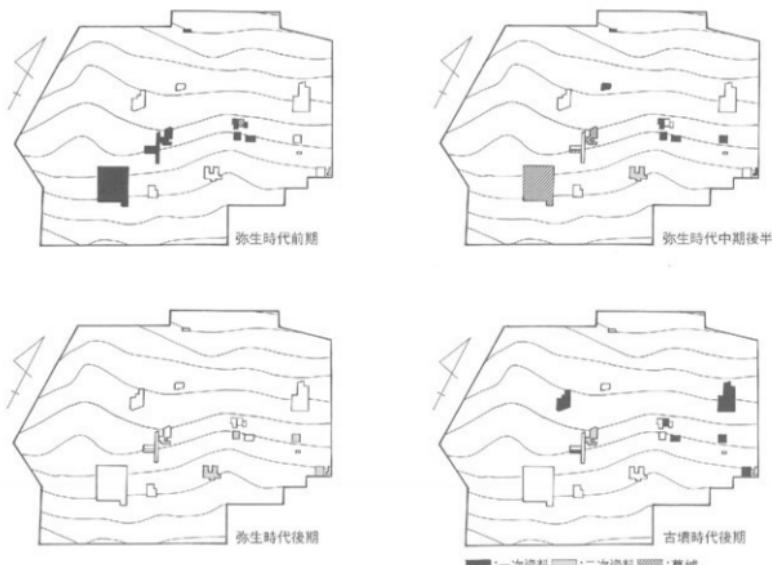


図21 霧井遺跡の集落動向(2)

## 結語

以上、雲井遺跡の集落動向について検討を行なった。縄文時代早期前半以降、中世に至るまで継続する遺跡であるが、集落動向に大きな変化のある時期について触れ、まとめとしたい。

縄文時代晩期に拡大する集落が、弥生時代前期前に一時縮小する事は、弥生文化受容期の集落のあり方を考える上で重要である。六甲山南麓において、縄文時代晩期から弥生時代前期にスムーズに移行する集落は少なく、大開遺跡、本山遺跡を除くと、弥生時代前期後半に新たに出現する集落が多い。

弥生時代前期後半に広がりを見せた集落は、中期前半、中期中葉に規模を減少させている。中期前半の周溝墓の存在は、中央部の微高地上に生活域の存在を予想させるが、中期中葉の資料は全く確認されていないため、状況は不明である。しかし、周溝墓という墓制の中期後半への継続を考えると、未調査区で検出される可能性が高い。中期後半は、周溝墓を主体とする墓域と居住域が近接している。市内では中期後半の居住域は、丘陵上に展開する例が大半であり、平野部に居住域が存在する数少ない集落構成を呈している。

弥生時代後期には、集落は大きく規模を減じる。弥生時代後期に大規模な環濠集落が形成される熊内遺跡とは対象的である。熊内遺跡は、扇頂部付近に位置し、立地条件が大きく異なる。弥生時代中期後半から後期初頭にかけて、集落が丘陵上に移動するなど、集落立地に大きな変化が見られる現象は、六甲山南麓の多くの遺跡で見られる。ひとつの要因として、中期後半の大規模な水害が考えられる。当遺跡の南西部に当たる第1次調査区周辺は、中期後半の周溝墓が洪水堆積で埋没しており、近世に至るまで居住域として利用された痕跡は確認されておらず、旧生田川の氾濫による強い影響を受けた結果と考えられる。

古墳時代後期には、集落が最大規模に広がるが、南半部では集落の痕跡は確認されていない。集落は北半部を中心として展開し、当遺跡の北側の二宮遺跡と共に、生田古墳群等の後期古墳の母体となった集落が形成されたと考えられる。

以上、限られた資料で検討を行なったため、集落動向の概観を示すことにとどまった。今後の調査による新たな知見により、今回の検討で抽出した集落動向の画期の経緯や詳細な変遷を明らかにしていきたい。

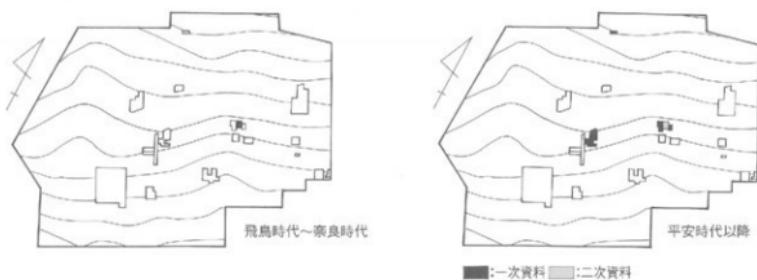


図22 雲井遺跡の集落動向(3)





1 1区 第1遺構面（南東から）



2 1区 第2遺構面（南東から）



2区 第1遮横面全景（北から）



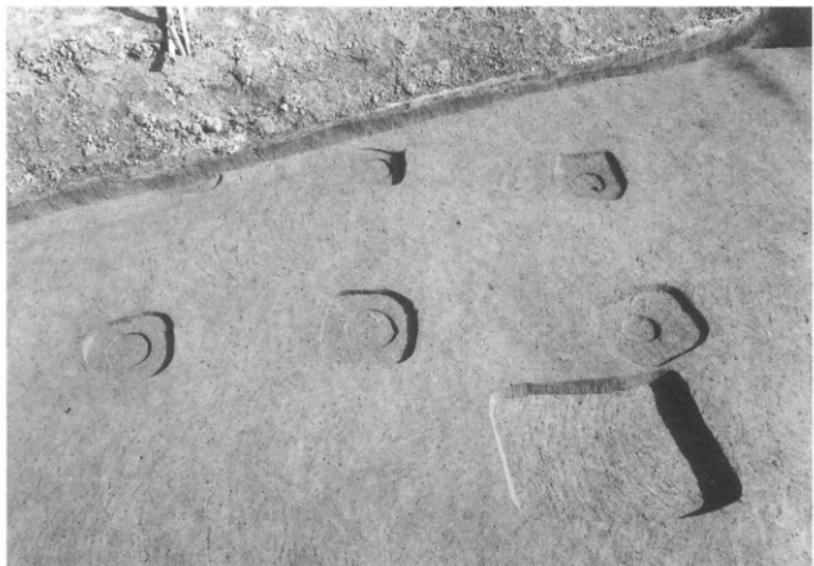
1 2区 第1造構面全景（南から）



2 SB101（東から）



1 SB102 (南から)



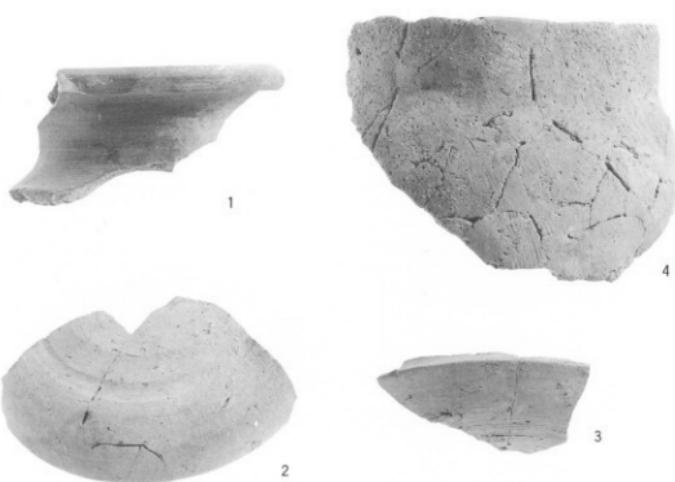
2 SB103 (北から)



1 2区 第2遺構面全景（北から）



2 SK201上層遺物出土状況（東から）



1 遺構に伴わない遺物



2 SK201上層出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	くじいいまき だい20じちょうき はっくつちょうさはうこくしょ							
書名	雲井遺跡 第20次調査 発掘調査報告書							
圖書名								
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山口英正							
編者機関	神戸市教育委員会							
所在地	〒650-8570 兵庫県神戸市中央区加納町 6-5-1 TEL078-322-6480							
発行年月日	2006年3月31日							
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
雲井遺跡	兵庫県神戸市 中央区琴ノ瀬町 3丁目311番	28100	03-27	34度 41分 38秒	135度 11分 59秒	20050325 ~ 20050425	880m <sup>2</sup> (約 440m <sup>2</sup> × 2面)	民間マンション 建設事業
所取遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
雲井遺跡	集落	縄文時代晩期 古墳時代後期		縄文時代晩期 の土坑 古墳 時代後期の掘立柱建物		縄文土器 須恵器 土師器		

### 雲井遺跡 第20次調査 発掘調査報告書

2006・3・31

発行 神戸市教育委員会文化財課  
 兵庫県神戸市中央区加納町 6-5-1  
 TEL 078-322-6480

印刷 デジタルグラフィック株式会社  
 兵庫県神戸市中央区弁天町1丁目1番  
 TEL078-371-7000



本書は、再生紙を使用しています。